

■ 舞台という芸術 ■

校長室には時折生徒がやって来る。多くの場合は、事前に用件が分かっている。例えば、新しい生徒会役員の挨拶だったり、上位大会に参加する生徒の激励だったりする。前触れなく来室するのは、部活動の生徒たちだ。華道部が生け花を飾っていってくれたり、茶道部が点てたお茶とお菓子を持って来てくれたりする。

7月下旬には、演劇部の生徒が何度も足を運んでくれた。8月8日の県高校合同発表会へのお誘いだった。発表当日は欠くことのできない会議があったが、終了後に駆けつけば間に合うと踏んでいた。本番を楽しみに、学校で行われた公開リハーサルは遠慮した。しかし、会議は長引き、会場に入れたのは、20分過ぎ。こんなことなら、2日前のリハーサルで全編見ておけばよかった。

演目は『宮川駅物語』。駅を舞台に親子のつながりを描いた人情劇である。夏休みに入った頃から、生徒玄関前でトンカントンカンと作っていたのは駅の改札だった。よくできていた。演



技も練習の成果が出ていた。衣装、音響、照明、演出など裏方の仕事もこなさなければならない。ここまで仕上げるのには、相当の努力があったはずだ。

3日前、全国高校総文優秀校の公演ですばらしい演劇を観た。きっかけは郷土芸能部門で選出された本県の輪島高校の太鼓『輪島大祭』を応援するためだった。さすが優秀校だけに、どの高校もすばらしかったが、中でも香川県の丸亀高校の演劇『フットボールの時間』は客席が最も沸いた。

時は大正9(1920)年。丸亀高等女学校では明治時代からフットボール(サッカー)が取り入れられていた。佐登子と智恵は仲間を増やしゲームをやろうと奮闘するが、良妻賢母からほど遠い姿に学校や親から圧力が掛かり始める。女性が足を広げて球を蹴ることが当たり前でなかった時代を生き抜いた女学生たちの、楽しくも切ない物語だった。

驚いたのは、演技者が各席と一体になっていることだった。どっと笑う、息を呑む、観客の反応に合わせて絶妙な間合いで演技が繰り出される。演技者と観客の呼吸が創り出す芸術が、映画にはない舞台の醍醐味だと知った。

本校演劇部は、「観客動員奨励賞」を受賞した。いくつかある賞の中で、来客数が最も多かったことによる。演劇は観客との直接対話で成り立つ芸術であるのだから、この賞は誇りとしていい。週末に明倫祭が始まる。演劇部の公演も楽しみのひとつだ。演目は変わるそうだが、今度こそは最初から最後まで味わわせてもらおうと思う。